史鉄生試論

久米井敦子

史鉄生は1951年生まれの作家である。北京で生まれ、1967年に名門の清華大学付属中学校（初級）を卒業する。1969年から1972年、両足が病魔に犯されるまでの間、陝西省延安地区の貧しい山村、清平湾で下放生活を送る。21才にして両足が麻痺してしまった彼は、帰京後、町工場で工芸品を作る傍ら、創作を志す。

彼のデビュー作は1978年、崇文区文化館の内部刊行物『春雨』に掲載された短篇小説「法学教授及其夫人」である[1]。それ以来現在に至るまでのおよそ14年間に、約50編の作品を発表している。若干の中編小説を除くと、ほとんどが短篇小説や、短篇の散文である。

史鉄生の名を高めた作品は、1983年に全国優秀短篇小説賞を受賞した「我的遥遠的清平湾」[2]である。その年には中国作家協会に加盟している。

翌1984年には「奶奶的星星」[3]で同賞を受賞し、作家として成功への階段を順調に昇り続ける。1985年には最初の作品集『我的遥遠的清平湾』が北京十月出版社より出版される。発表された作品の数も1984～85年がピークであることからも考えて、このころが史鉄生の作家として最も安定した時期だったろう。

1986年には彼の作品の中では最長の中編小説「挿隊的故事」[4]や、死や人間の存在などについて哲学的な解明を試みた「我之舞」[5]などの力作が見られる。そしてこの年を境にして、彼の作品は難解で抽象的な、まるで哲学書を思わせる　“哲理小説”へと傾いていくのである。作品の数も減り、内容も一作ごとに難解になっていく印象を読者に与える。まるで、この世の全てを悟りきったような冷静な目で、静けさと厳かさを漂わせながら、死について、人生の意義について、読者に語りかけるようになるのだ。

1988年には二つ目の作品集『礼拝日』が華夏出版社から出版された。その年には「原罪」・「宿命」[6]を発表して注目を集める[7]。

それ以後、現在に至るまでの間、史鉄生は目立った活動はしていない。作品の発表も少なく、特に注目される作品も書いていない。

以上、史鉄生という作家について簡単な紹介をした。文化大革命の最中に青

春時代を過ごした多くの作家たちと同じように、彼もまた、辺鄙な農村での下放生活の経験を持ち、その経験を自分の文学の中に生かしている。そして、その下放生活によって病気になり、下半身不随になるという、苛酷な苦しみも味わい、現在に至っているのだ。

史鉄生の作品を読んでみると、身体障害者の悲しみに満ちた世界を題材にしたものが多い。それらの作品が、読者に暗く沈んだ印象を与えるのは免れない。しかし一方では、自分に大きな成長をもたらした、美しく豊かな思い出として、下放生活における様々な出来事や、そこで出会った色々な人々との交流を、淡々とした口調で、しかし、詩情豊かに描いた作品もある。また、先にも少し触れたとおり、最近6、7年は“哲理小説”を多く書くようになった。

一人の作家が多様なタイプの作品を書くのは当然であり、創作活動を続けて行くに従って、その作品の傾向に変化が現われるのも、ごく当たり前のことだ。しかし、いかに作風が大きく変わっていっても、その作家が、自分の文学のテーマとして一貫して持ち続けていくものがあるのも、普通であろう。史鉄生にとってのそれを一言で言えば、私は、“生”、つまり、生きることそれ自体ではないかと思う。生きることは苦しい。しかし、どんなに苦しくとも人間は生きなければならないし、苦しみと戦いながら生きることこそ、最も価値のあることだ――陰鬱な内容の作品からも、叙事詩のような、さわやかな作品からも、難解な哲学的な作品からも、彼の作品全てから、このような声が聞こえる気がしてならない。

以下、適当な例を挙げながら、史鉄生の文学に現われている“生”について考えていきたい。

◇

史鉄生の書く小説には、苦悩する人間が多く登場する。このこと自体はどの作家にも共通したことである。しかし、史鉄生の描く人間たちの苦悩は、救いようがない。身体に障害を負い、あるいは貧しく苦しい環境に生まれついて、そのために社会から不当な評価をされているものばかりだ。客観的に考えて、幸福という側面をほとんど持たず、解決のメドのまったくたたない苦悩、いわば「根本的な苦悩」を抱えている人々である。

では、史鉄生は苦悩する人々を描くことによってどのように“生”を訴えているのか。

最初に、1980年の「午餐半小時」[8]を見てみよう。

字数にして4000字に満たない短いこの作品は、町の小さな縫製工場で働く8.5人（8人の一人前の工員と、一人の半人前の足の不自由な会計係の青年）の昼休みの会話を、軽快なタッチで描いた作品で、史鉄生の代表作に数えられている。この8.5人は、みな老人や障害者で、貧しい。わずか30分の昼休みにはくちゃくちゃと食物をかじりながら、とりとめのない、決して上品で知的とは言えない会話をわめき散らす。この日は、外で車の急ブレーキ音が鳴ったのをきっかけに、「もし自分がお偉いさんの乗った“紅旗”に轢かれたら…」という話題が飛び交った。ある者は息子のために部屋を世話してもらう、と言い、またある者は、僻地に行かされている家族を呼び戻してもらう、と言う。そんな夢物語で話が盛り上がっていくうちに30分がたち、工場の中にはまた単調なミシンの音が鳴り始める。

単純な内容だが、下町の中高年世代の通俗的で軽快な会話の合間に、ミシンの音や食物の咀嚼音などの聴覚的効果も施され、また、会話の節目に青年の、第三者を決め込んだ事務的な言葉が置かれてリズム的効果を発揮しているなど、初期の史鉄生の創作に対する意欲が感じられる佳作といえよう。この作品のテーマは、普通の小市民の単調でごく日常的な生活におけるとりとめのない会話を通して、特権階級との格差という社会矛盾を指摘すると同時に、人間は平凡で単調な生活を、絶えることのない不満や夢想を抱きながら生きていくしかない、ということである。ここに初期の史鉄生の“生”が見られる。

その他、町の小さな工場で働く、足を患った3人の待業青年を描いた「就是這個角落」[9]（1980）では、優しく愛らしい王雪が去った後も、彼女がもたらした生きる希望を忘れずに生き続けようとする主人公たちの姿が印象的である。また、「在一個冬天的晚上」[10]（1982)では、様々な葛藤に揺れ動きながら も子供をもらう覚悟をした障害者の夫婦が、最後に「障害者にやるくらいならば自分で育てたほうがまし」と憤慨する母親を、偶然に見てしまって深く傷つくが、二人でお互いを拠り所にして生きていくことを決心する。いずれの主人公たちも、平凡な、むしろ、苦しみや悲しみの多い日々を送らなくてはならない。その日常を心の拠り所 —— 王雪、夫、妻 —— を頼りに自分の境遇と戦うことこそ、生きるということ＝“生”なのである。

しかし、これらの作品に表れている“生”は、単に苦境を強く生きぬくことにすぎない。

次に、もう少し新しい「命若琴弦」[11]（1985）を見ていきたい。

主人公は二人連れの盲目の旅の講談師。老人の師匠と、若い弟子である。老人の弾く琴の中には先代の師匠から譲り受けた、盲目を治す処方箋が入っていて、それを取り出して目を治すには、弦を1000本弾き切らなくてはならないという。老人はついにその目標を果たし、処方箋を取り出して街へ下りていくが、その処方箋はただの白紙であった。数十年来の目標が一瞬にして空虚となり、老人は絶望する。その頃、若い弟子は失恋の痛手によって姿を消していた。やっとの思いで弟子を待たせてあった山村に着いた老人はそれを知ると、弟子を探しに出掛け、探し当て、なぜ俺達は目が見えないのだ、と訴える若い弟子に、白紙の処方箋を託し、1200本の弦を弾き切れ、と告げる。

この作品は、哲学的な要素を含んだ最初の作品で、初期のリアリズムと最近の“哲理小説”との過渡期でもある。この作品には、“目的”と“過程”という概念が初めて顕在化する。次は、老師匠が弟子を探している場面である。

> 彼はまず自分がしっかりしなくてはと思ったが、駄目だった。前方に目標がなくなってしまったのだ。
>
> 彼は道中、過ぎ去った日々をなつかしく思い出した。かつていそいそと、わくわくしながら山を越え、道を急ぎ、琴を弾いたこと、そして、焦燥感に駆られ、思い悩んだことまでもが、なんと楽しかったことか！たとえ実際には虚構であったにしても、あの頃は心の弦を弾きしめるものがあったのだ。老人は、自分の師匠の臨終の光景を思い出した。師匠は、自分の不要になった処方箋を彼の琴の中に封じ込んだ。「死なないで下さい。あと何年か生きれば、見えるようになるのですから。」こう言った時の彼は、まだ子供だった。師匠は長い間黙っていたが、最後に言った。「いいか、人間の命はこの琴の弦のようなものだ。張りつめてこそうまく弾ける。うまく弾ければ、それで充分なのだ。」…なるほど、つまり、こういうことだ。目的はもともと存在しない。そうだ。彼の一生はこの虚構の目的によって張りつめられてきた。だからこそ生活は生き生きしていた。大切なのは、そのピシと張られた過程の中から喜びを得ることなのだ。（傍点筆者）

ところで史鉄生は、随筆「答自己問」（1988）にこう書いている。

> 今私が思うに、過程を重視して初めて人は精神の実現と昇華を重視できて、名利や情の占有力（すなわち目的）に苦しめられたり束縛されたりするこ

とがなくなるのだ。精神の昇華は、まさに止むことのない一つの過程で、いかなる目的に到達しても止まることはない。だから、天を恨み、人を憂い、恨みと涙で生命を閉ざしてあくせくすることもなくなる。（中略）目的は空であっても設置しなくてはならない。そうでなければ、過程はどちらの方向へ行ったらいいのだ？どこにも通じない過程が過程といえるだろうか？（傍点筆者）

このように、「命若琴弦」で、史鉄生は、人生において価値あることとは“目的”を達成できるか否かではなく、その“目的”に到達しようとする“過程”をいかに生きるかにあるということを説いている。“目的”はその指標にすぎない。史鉄生の人生観が、ただ強く生きることを主張することから、この段階――つまり、生＝“過程”の境地に到達していることがわかる。李劼は「論中国当代新潮小説」[13]の中でこのことを、「聖地へ詣でる者の幸福は、聖地に到達できるかどうかではなく、聖地への長い道にある。」と表現している。この例えは非常に適切である。

◇

ここで、前出の作品とは少し異なった雰囲気の作品を挙げておこう。

史鉄生を語るのに忘れてはならないのが、下放体験を描いた詩情豊かな作品である。舞台は陝北・延安地区の貧しい山村、清平湾。そこで出会った素朴な村人たちとのふれあいや、様々なエピソードを、淡々としたタッチで、しかしまるで叙事詩を思わせるように感情豊かに描いた「我的遥遠的清平湾」（1983）と「插隊的故事」（1986）がそれである。

「我的遥遠的清平湾」は、作者自身と思われる主人公の「私」が、知識青年として清平湾に下放して、重労働のために腰を痛め、白老漢という老人と一緒に牛飼いをするようになってから、病気が悪化したために北京に戻るまでの約3年間に起こったいくつかのエピソードを描いた短篇小説である。腰を痛めて寝込んでいる「私」の所に、隊長がわざわざ貴重な白饅頭を届けてくれたこと、北京のことを色々と聞きたがる白老漢の孫娘の留小兒、医者への謝礼を出し渋ったために息子を死なせてしまったことをまだ忘れられずに苦しむ白老漢…。足が動かなくなって北京に戻った「私」に、白老漢は、養生するようにと貴重な食糧切符を送る。「私」が、これは陝西省でしか通用しない、と言って返そ

うとしても、聞かない。その10年後、留小兒が北京に「私」を訪ねて来て、清平湾の生活がよくなったことを告げ、この物語は終わる。

「挿隊的故事」は、「我的遥遠的清平湾」を空間的、時間的ともに拡大したような作品である。時代設定は現代で、かつての“挿隊”仲間は皆成人して、社会に出ている。“挿隊”の小説をもう一度書くために、出版社の協力で清平湾を再訪する現在の「私」と、清平湾での生活を送っている昔の「私」、そして、それぞれの「私」の周囲の人々や、そこに起こる出来事を描いた短い39章から成る。

この二つの作品こそ、人生の“過程”を描いたものだ、と言っても過言ではないだろう。

「幾回回夢里回延安 —— 関於『我的遥遠的清平湾』」[14]に、史鉄生は以下のように書いている。

> 病気のために北京に戻ったあと、私は初めて小説を書く夢をもった。生産隊での生活（訳注：ここでは“挿隊”の訳。以下同様）の経験がある者が執筆をしようと思えば、おそらくまずそれを書こうと思うだろう。私も、10年後を待つまでもなく、すでに何度も生産隊での生活の物語を書こうと試みていた。当時の私は、小説とは、成り行きがいつも気になり、感動して涙を落とすような物語を書くことだと理解していた。長い間構成を練り、肯定的人物、否定的人物を設定し、諸葛亮式の人物、張飛式の人物を配置した。結果は全て失敗に終わった。（中略）私は生産隊での生活を経験したが、運がなかった —— 私の生産隊での生活は、創作に適したものではなかったのだ。この世の生活は二種類に分けられる。一つはただ送るだけの生活で、もう一つが、書くことができるものだ。小説を書く希望は、しばらく漠然としてしまった。しかし、苦しいながらも楽しい生産隊での生活は、いつも私の心から離れず、生産隊での生活の経験がない友人と話せば誇りに思えて、興奮するし、経験のある友人と思い出話に耽れば、親しみを感じ、心が和む。それらのこまごまとした過去の出来事を語るたびに、人は皆じっと聞き入り、感動する。話し手は口を閉じようとしないし、聞き手は離れようとしないのだ。最後まで話すと、たとえ立派な結論が得られると思えなくても、皆じっと考え込んで黙ってしまう。そのたびに、目の前に雄渾な画面が動き、心の中に悲しく力強い旋律が流れるような気がする。そして自分が構成した複雑怪奇な物語を見ると、減らず口の

ごときに見える。こうしたことの繰り返しが百回にものぼり、十年がたった。そして、もし十年たっても消え去らなかった思い出を書けば、読者もそう簡単に忘れはしないだろう、と、私はやっと思いついたのだ。（傍点筆者）

つまり、“挿隊”の物語を書くには、そこで起こった“こまごまとした過去の出来事”をそのまま書けばいい、ということである。同じ文章で、史鉄生は以下のようにも書いている。

多くの人の歴史とは、こまごまとした、ありきたりの生活から成っている。変化に富み、極めて精巧な物語を無理に作れば、大多数の人からは疎遠になるだけである――何人かの優れた作家の作品（たとえば、ヘミングウェイや汪曾祺）を吟味することによって、私は段々とそう信じるようになった。気晴らしならともかく、こういう物語から自分の平坦な経歴を連想する者があろうか？他人の幸運に気を使って楽しい者があろうか？芸術の美感は連想にある。もし、読者が自分の生活を連想することによって作品を補足できれば、作者にとってもメリットになる。（傍点筆者）

単調で平凡な日常こそ人間の歴史であり、それをありのままに描くことが優れた作品を生み出す。「単調で平凡な日常」とは、生きる“過程”である。この2編の小説に描かれている人々は、高い教養も、崇高な思想も持っていない。ただ、貧しく厳しい毎日を過ごしているだけである。しかし、その毎日の生活自体が、苦しさとの戦いであり、「食べていく」という“目的”に向かう“過程”だといえよう。彼らはいわば、人間として理想的な生き方をしているのだ。そしてそんな彼らの生活こそ、史鉄生が“挿隊”の生活を愛し、懐かしむ所以なのだ。

◇

ここで、“哲理小説”というものについて触れてみたい。

陳坪は「文学在告別天真――柯雲路、史鉄生、張石山近作管窺」[15]という文章の中で、「『山頂上的伝説』の内容について叙述しようと思えば、大きな困難に直面してしまう。というのも、この小説が“写意”式の哲理小説だから

である。」[16]と言っている。

史鉄生の作品（特に1986年の「我之舞」以降のもの）の中には、難解な哲学的な内容で、非リアリズム的な手法が用いられているものがあることはすでに述べた。これらの作品は、筋書きの展開があまりなく、作者自身の人生観、価値観等の表現の場としての要素が強いように思われる。陳坪の言う「“写意”式の哲理小説」とは、精神や、価値観、人生観、宇宙観など、作者自身の内面の世界や思想を直接的に描いている作品という意味である。

形式は異なっても、史鉄生の“哲理小説”はテーマの上では他のリアリズム的な作品と大差なく、やはり人間の人生とは苦しみとの戦いの“過程”であり、“目的”は“過程”の指標にすぎない、といった内容を扱ったものが見られる。

まず、前述した「我之舞」である。

前述したとおり、この作品は史鉄生の“哲理小説”の中では草分け的存在と言えるものである。内容は、4人の身体障害者 ——— 足の悪い「十八（＝私）」と「世啓」、足も目も悪い「老孟」、そして、白痴の「路」——— が、ある荒廃した庭園で寄り添いあうように死んでいた二人の老人の自殺死体を発見し、彼らの幽霊が人間の存在や、死について語っているのを聞くというものである。

ここでは、以下の部分を見てもらいたい。

> 二人の亡霊がまた現われた。（中略）「全ての存在は主観と客観が共に参与していて、しかも存在は絶対である、ということは、もう証明してあったよな。」声が空中に響いた。「わかっているわ。」声が祭壇の上から返ってきた。「そのことは、わかっているわ。」（中略）「それならば、主観も絶対なわけだ。」と、男が言った。「ちょっと待って。」女が言った。紫がかった霧、無数の虹が現われている。女が言った。「主観が絶対だったら、どうなの？」「絶対とはどういう意味だい？」「始まりもなく終わりもなく限りもない、限りがなく終わりも始まりもない、そうでしょう？」「よくわかっているな。」女は笑いだした。「パシッ！」という（叩く）音がして、男も笑いだした。（中略）「それならば、主観の名前は何か？」男が尋ねた。「主観？なんていうの？」「主体、とも呼べる。」「主体？」「主観も主体も、『私』とも呼べる。」（中略）「それなら、『私』も絶対で、限りがなく、始まりも終わりもない。」「なるほどねえー！」女は手を揉んで大笑いした。（中略）女が言った。「あなたはまだ、

あのことを言っているのね。」「そうさ。」男が言った。「我々は永遠に死なない。」「あなたの言っているのは抽象的な『私』のことでしょう？でも一人一人の具体的な私には始まりも終わりもあって、死ぬわ。」「無限とは何か。無限とは有限が無限に組み合わさったものだ。」「そうよ。」「それならば、一回の有限な私が終わったら、すぐにまた次の有限な私がある。どうだ？こうすれば、無限の『私』が実現するのだ。」「何が言いたいの？」「来世は永遠に途切れること無く、どこまでも連なって絶えることがない。」（中略）「死は、輝かしい終結にすぎない。」男が言った。「同時に、光り輝く始まりなのだ。」「輝かしい終結と光り輝くたる始まりねえ。」と、女が繰り返した。（括弧内、傍点筆者）

自殺した老夫婦のこうした会話に対して、老孟が以下のように嘲笑と攻撃を加える。

「輝けるだの光り輝くだの、あんたたち今回はみっともないぜ。」

「誰だ？」男と女は同時に聞いた。見ると、老孟がぼんやりと私の横に座っていた。「誰でもいいだろう。」老孟は酒を飲みながら、二人の亡霊に答えた。「俺は、あんたたちが輝かしく生きなかったことも光り輝いて死ななかったことも知っている。今回は本当に、冴えないったらありゃしねえ。」

二人の亡霊は長い間黙っていた。

「行っちゃったのかい？」私が言った。

「泣いているのさ。」老孟が言った。彼はたて続けに酒を飲みながら狂ったように大笑いした。

路が興奮して言った。「彼らはムチャクチャに踊ったんだよな、老孟。ムチャクチャに踊ったんだ。」

「もとはちゃんと踊っていたのさ。老孟は片腕を路の肩にかけて言った。「でも、まだ死ぬ力が残っているうちに、この馬鹿どもは踊るのを止めてしまったんだ。」（傍点筆者）

路の言う「踊る」とは、生きることである。老孟は、二人の老夫婦が自殺したことを攻めている。自ら生を放棄しておきながら、来世に期待をかける二人が許せなかったのだろう。そしてこの老孟の言葉は、史鉄生自身の言葉として受

け取れる。

史鉄生の“哲理小説”に数えられるものの一つに「車神」[17]（1987）という短篇小説がある。7つのごく短い章からなっているこの作品は、電動式の車椅子を買った作者が、部屋のかたすみにポツンと置いてある古い手動の車椅子を見て、その車椅子と共に歩いてきた苦難の十数年間を振り返る、という内容である。昔の同級生の母親たちが、お金を出しあって車椅子を購入し、自分に送ってくれたことや、生まれて初めて海に行ったとき、海岸で客を馬に乗せて商売をしている老人が、車椅子を引きながら馬に乗って走ってくれたことなど、それぞれの章に車椅子との思い出が描かれている。全体の詳しい内容については割愛するが、ここでは、3つ目の「烏と鳩」という章を見ていきたい。

この章は非現実的で象徴的である。登場するのは、「私」と少年と、「私」の夢の中に出てくる鳩の群れと烏の群れである。冬のある日、「私」は自分が裸足で柔らかい山道を歩いている夢を見る。黒い岩の上には無数の鳩が喜びに満ちて生息していた。目が覚めると、足は依然として麻痺したままであった。見ると、車椅子の傍らに一人の子供が旅支度を整えて「私」が目覚めるのを待っていた。少年は「私」を連れて、色々な所へ行った。少年は道中、「もし死んでいたら、恐いものなどあろうか」「死すら恐れないなら、どうしてぼくと一緒に遠くへ行くことを恐れることがあろうか。」という歌を歌った。「私」が見ようとしても、子供は自分の姿を見せてくれない。「私」がその朝見た夢に出てきた鳩のことを話すと、子供は、「烏は黒い鳩、鳩は白い烏」と言って、そして消えてしまう。果てしない銀世界には、ただ二本の車輪の痕が、黒く残っているだけだった。

ここに書かれている「私」は足が悪いことで人生に絶望を感じている。「鳩」は幸福を、「烏」は不幸 —— 現在の自分の生活 ——を象徴している。道中の子供の歌は、「死んでしまえばおしまいだ。そんな死（＝自殺）すら恐れないのに、どうしてぼく（＝車椅子）と一緒に生きていくことを恐れるのだ？」という戒めの言葉ではないだろうか。そして「私」が夢の話をすると、少年は「不幸とは、本当は幸福なのだ ——それを克服しようと努力することによって、自らが向上するのだから。幸福についてはその逆が当てはまる。」ということを、烏と鳩に例えて「私」に告げ、消えていく。あとに残された車輪の痕は、これまでに歩んで来た苦難の道程を象徴している。この章は、生を放棄しかけた「私」への車椅子からの激励である。

2編とも、生きる“過程”の尊さが大きなテーマの一つになっている作品だ

といえるだろう。生きる“目的”と“過程”との関連は出てこないが、代わって“死”の問題が登場する。

やはり“哲理小説”に数えられる「毒薬」[18]の主人公は、絶望的な気持ちで故郷の島を捨てた男であった。彼は島を離れるときに、医者のもとからこっそり毒薬を持ち出した。島を出てからも苦難続きの毎日であったが、手元にある毒薬を思って、幾多の苦しみを乗越え、現在は妻子もでき、自殺することなど忘れてしまった。この男は「これさえ飲めば、いつでも死ねる。死ねば、嫌なこの世から脱出できる。」と考え続けて、苦難の毎日を過ごすうち、「どうせいつでも死ねるのだから。」と思って気が楽になった。そしてとうとう、死ぬことをすっかり忘れてしまったのだ。

「我之舞」や「車神」を通して、自ら“生”の過程を放棄することを否定している一方、史鉄生は、生きていること以外にその理由を知りたがるもの＝人間と、動物の最大の相違点は自殺することだとも言っている。（「答自己問」）この矛盾する“自殺”に対する観念が史鉄生の中で一つになったものが、この「毒薬」の主人公の姿であろう。

ところで、史鉄生にとっての“死”とは何か。

死について語るとき、史鉄生はまず「死は、私にはわからない。私は死んだことがないのだから。」と前置きをおく。（「答自己問」）誰も死んだことがないのだから、どんなものなのかを知る術はないけれど、ただわかっているのは、死は必ず訪れる、ということである。必ず訪れる死を、急ぐ必要はない。「我與地壇」[19]（1991）にも、「人間が生まれるということは、もはや論じる余地のない問題であって、神様がその人に与えた一つの事実にすぎない。神様はその事実を我々に与えるとき、ついでにその結末も保証している。だから、死は急いで成し遂げようとする必要はなく、必ず訪れる記念日である。」と書かれている。

◇

史鉄生は次のように告白する。

> 創作をするのは、自殺に至らないためである。生きているというだけではなく、生きる理由を知ろうとせずにはいられないという欠点を持っていて初めて人間といえる。（中略）創作とは、生きるために確かな理由を探

すためのものであり、最後までそれがみつからなければ、自殺か、それより悪いことになるのは免れない。（「答自己問」）

足を悪くして人生に絶望して陝北から戻った当時、生きるための理由を求めて始めたのが文学の創作であった。自殺を考えたこともあった。しかし、今こうして作家として作品を書き、多くの読者に様々な感動を与えるようになった史鉄生 —— 彼は自分が経験した数えきれない悲しみ、苦しみと、それを克服して得た、生きることの喜びや感動を、私たちに小説を通して語りかける。

「私が陝北の民謡が大好きなのは、我々を教育指導するのではなく、ただ語りかけてくるだけだからである。我々の頭上に立ったことはなく、いつも我々と向かい合って、手を取り合う。ただ感情を大切にすること、故郷を思うことを私たちに語りかけるだけだ。」（「幾回回夢里回延安」[20]）と史鉄生自身は語っているが、彼の書く小説が読者に対する態度は、この陝北民謡と同じだといえよう。

◇

最後に……。

彼の最近の作品を読むと、彼がこのまま自分の世界に引きこもってしまいそうに感じられ、一人のファンとしてやや懸念している。彼の語っている“生”という問題は、全人類に共通の課題であり、換言すれば、ごく基本的な、当たり前の、しかし、なかなか気付かれない問題である。多くの読者に読まれるために、哲学的な観念を、美しく感動的な物語に包み込んだ、以前のような作品を期待したい。ちょうど、苦い薬をオブラートで包んで飲むように。

—注—

1　この作品は翌年の1979年に、『当代』第2期に転載され、これが史鉄生の実質的な文壇へのデビューになる。中国文芸研究改編『「新時期文学」の108人』には、以下のようにある。「78年末より創作を開始。『法学教授及其夫人』が崇文区文化館の内部刊行物『春雨』に掲載されると文学界の注目を集めて、作家の孟偉哉や秦兆陽の援助で『当代』79年2期に転載される。この作品は公式に発表された処女作となった。」

2 『青年文学』1983－1原載。『小説月報』1983－3、『小説選刊』1983－3転載。

3 『作家』1984－4原載。『小説選刊』1985－4転載。

4 『鍾山』1986－1掲載。

5 『当代』1986－6掲載。

6 『鍾山』1988－1掲載。

7 この作品についての評論には、李劼「剃刀辺縁的二種奏鳴――『原罪』、『宿命』之評」（『文学自由談』1988－5／『復印報刊資料』1988－11転載）があり、外に同氏「論中国当代新潮小説」（『鍾山』1988－5）趙玫走出煉獄――史鉄生的印象」（『作家』1988－11／『復印報刊資料』1988－1転載）、朱偉「鉄生小記」（『鍾山』1990－3）、蒋原倫「史鉄生小説的幾種簡単的読法」（『当代作家評論』1991－3／『復印報刊資料』1991－9）等に部分的に取り上げて、論じられている。

8 『花渓』1980－9原載、『小説選刊』1981－1転載。

9 『小説季刊』1980－3掲載。

10 『醜小鴨』1982－10。

11 『現代人』1985－2掲載。

12 『作家』1988－1・2掲載。

13 『鍾山』1988－5掲載。

14 『小説選刊』1983－7掲載。

15 『山西文学』1986－10掲載。

16 「写意」とは、中国語で「形式に拘泥せず、精神の表現に重きをおく画方」（『中日大辞典』）という意味。ここでは、その意味で日本語として用いる。

17 史鉄生『礼拝日』（北京十月出版社刊、1988年）掲載。原載は『三月風』1987年、号数は不明。

18 『上海文学』1986－10掲載。

19 『上海文学』1991－1原載、『新華文摘』1991－3転載。

20 『小説選刊』1983－7掲載。

◆史鉄生作品リスト（未定稿）

＊「法学教授及其夫人」：『当代』1970－2

＊「就是這個角落」：『小説季刊』1980－3（金水の署名で）

＊「没有太陽的角落」：『今天』1980-7（金水の署名で）
＊「兄弟」：『花城』1980-7
＊「午餐半小時」：『花溪』1980-9／『小説選刊』1981-1転載
＊「緑色的夢」：『鐘山』1981-2
＊「綿々的秋雨」：『中国青年』1982-4
＊「人間」：『花城』1982-6
＊「在一個冬天的晩上」：『醜小鴨』1982-10
＊「黒黒」：『滇池』1982-11
＊「我的遥遠的清平湾」：
『青年文学』1983-1／『小説選刊』1983-3、『小説月報』1983-3転載
＊「夏天的玫瑰」：『醜小鴨』1983-3
＊「巷口老樹下」：『青年文学』1983-6or7？
＊「白色的紙帆」：『作品與争鳴』1983-7
＊「幾回回夢里回延安 —— 関於『我的遥遠的清平湾』」（散文）：
『小説選刊』1983-7
＊「白雲」：『小説界』1984-1
＊「関於農牧師的報告文学」：『文学家』1984-3
＊「山頂上的伝説」：『十月』1984-4
＊「奶奶的星星」：『作家』1984-4／『小説選刊』1985-4転載
＊「足球」：『人民文学』1984-5
＊「為了人們相互間的美好関係」（散文）：『小説選刊』1984-6
＊「老人」：
『文学青年』1984-11／『小説月報』1985-1転載／史鉄生『礼拝 日』所収
＊「命若琴弦」：『現代人』1985-2／史鉄生『礼拝日』所収
＊「神童」：『青年作家』1985-4
＊「来到人間」：
『三月風』1985-6／『小説選刊』1985-9転載／史鉄生『礼拝日』所収
＊「合歓樹」：『文海月刊』1985-6／史鉄生『礼拝日』所収
＊「雑感三則 —— 権充『奶奶的星星』的創作談」（散文）：
『小説選刊』1985—12
＊「挿隊的故事」：『鐘山』1986-1／史鉄生『礼拝日』所収
＊「我之舞」：『当代』1986-6／史鉄生『礼拝日』所収
＊「毒薬」：
『上海文学』1986-10／洪文書店（台湾）文学叢書187『第六部門 —— 八

十年代中国大陸小説選4』所収／史鉄生『礼拝日』所収／史鉄生『礼拝日』所収

＊「随想與反省」（散文）：『人民文学』1986-10／史鉄生『礼拝日』所収

＊「礼拝日」：『中外文学』1987-5／史鉄生『礼拝日』所収

＊「車神」：『三月風』1987-?／史鉄生『礼拝日』所収

＊「原罪」：『鐘山』1988-1

＊「宿命」：『鐘山』1988-1／三聯書店（香港）刊『中国小説一九八八』所収

＊「答自己問」（散文）：

『作家』1988-1·2／洪文書店（台湾）文学叢書187『第六部 —— 八十年代中国大陸小説選４』（1988年）所収

＊「一個謎語的幾種簡単的猜法」：『収穫』1988-6

＊「我的夢想」（散文）：『中国残疾人』1989-1

＊「対話練習」：

『東方紀事』1989-2／三聯書店（香港）刊『中国小説一九八九』所収

＊「舞台効果」：

『東方紀事』1989-2／三聯書店（香港）刊『中国小説一九八九』所収

＊「脚本構思」：

『東方紀事』1989-2／三聯書店（香港）刊『中国小説一九八九』所収

＊「“精神内科”」（散文）：『人民文学』1989-3

＊「鐘声」：『鐘山』1990-3／『小説月報』1990-?転載

＊「好運設計」（散文）：『天涯』1990-9

＊「我與地壇」：『上海文学』1991-1／『新華文摘』1991-3転載

＊「我二十一歳那年」（散文）：『三月風』1991-2

＊「中篇１或短篇４」：『作家』1992-1／『小説月報』1992-4転載

＊「謝幕」（散文）：『小説月報』1992-4

原載年期不明なもの

＊「秋天的懐念」：

『南風報』原載／春風文芸出版社、遼寧教育出版社刊『中国微型小説選』（1990年）収録

＊「春・夏・秋・冬」：『南風報』原載

（関連文献）

＊易言「不可沈溺於這種境界」：

『文芸報』1981-4／『復印報刊資料』1981- ?転載
＊易言「新作短評『我的遥遠的清平湾』」：『文芸報』1983-4
＊馮牧「願史鉄生健歩前進」：『文芸報』1983-6
＊郭志剛「心弦上的歌 —— 読短篇小説『我的遥遠的清平湾』」：
『人民日報』1983-8/9
＊石湾「在輪椅上写小説（記青年作家史鉄生）」：『文学報』1983-9/29
＊張明「史鉄生印象瑣記」：『作家』1984-1
＊劉振声、任之「史鉄生和他的創作」：『文汇報』1984-3/29
＊華銘「質朴而濃郁的抒情」：『写作』1984-5
＊李彤「不妨来一点"雑色幽默"：読史鉄生的『関於牧師的報告文学』」：
『中国青年報』1985-3/31
＊林為進「他是真正的男子漢：談史鉄生和他創作」：
『青年評論家』（石家荘）1985-4/1
＊曾鎮南「生才是厳峻的：読『来到人間』」：『光明日報』1985-10/17
＊艾平「史鉄生其人及其他」：『当代作家評論』（瀋陽）1986-1
＊査新華「站在新的高度透視生活：史鉄生的新作『挿隊的故事』」：
『文学報』（上海）1986-3/6
＊陳坪「文学在告別天真：柯雲路、史鉄生、張石山近作管窺」：
『山西文学』（太原）1986-10
＊李劼「剃刀辺緣的両種奏鳴 —— 『原罪』、『宿命』之評」：
『文学自由談』1988-5／『復印報刊資料』1988-11転載
＊李劼「論中国当代新潮小説」：『鐘山』1988-5
＊程徳培「対抗自殺的故事　　史鉄生論」：『上海文論』1988-6
＊趙玫「走出煉獄 —— 史鉄生的印象」：
『作家』（長春）1988-11／『復印報刊資料』　1989-1転載
＊呉俊「当代西緒福斯神話 —— 史鉄生小説的心理透視」：
『文学評論』1989-1／『復印報刊資料』1989-1転載
＊史鉄生、李鋭、姚育明「非文学性閑聊」：『文学角』（上海）1989-1
＊朱偉「鉄生小記」：（『鐘山』1990-3）
＊楊晩敏「突囲：生命的追求（史鉄生）」：
『上海文論』1990-5／『復印報刊資料』1990-11転載
＊蔣原倫「史鉄生小説的幾種簡単的説法」：
『当代作家評論』1991-3／『復印報刊資料』1991-9転載
＊胡河清「史鉄生論」：
『当代作家評論』1991-3／『復印報刊資料』1991-9転載